日本への一般炭輸出に期待

シェル・カナダ社社長
L・F・J・ボルジャー

シェル・カナダ社（本社カルガリー）は、石炭および石油化学製品を中心に、日本とのかかわりを深めている。

シェル・カナダ社は、百パーセント子会社のクロウズ・ネスト・リソーシス社（本社カルガリー）を通じて、石炭の開発・生産を活発に行っている。クロウズ・ネスト社は、ブリティッシュ・コロンビア州とアルバータ州に大きな鉱山をもっており、一九八一年にBC州東南部のライン・クリークで一般炭を産出して以来、積極的に鉱山開発を進めてきた。ライン・クリークでは今年に入って石炭の搬出を開始、四月には初めて輸出もした。今年は原料炭の生産も始まる予定で、来年初めには日本の鉄鋼業界に輸出されることになっている。

クロウズ・ネスト社は、未開発の膨大な石炭資源をもっており、今後の日本への一般炭輸出に大きな期待を寄せている。

シェル・カナダ社はまた、アルバータ州で石油化学に投資しているが、その狙いのひとつはカナダの国内市場にある。ところが、現在建設中の大きいプラントだと国内市場だけでは不十分なので、国際市場に安定的かつ長期的に製品を供給することに力を入れたいと思っている。

中でもわれわれが強い関心を寄せているのは日本市場である。シェル・カナダ社は、先進工業国における化学産業の重要性をよく認識しており、これから両国間の石油化学貿易を発展させる上で相互に補完的な役割を果たせるよう、日本の化学業界と協力できる体制を探っていきたいと考えている。

エドモントン近郊のスコットフォードで建設中のシェル・カナダ社スチレーン工場。

理解と友情の上に立つ日加関係

三井物産相談役
橋本栄一

私の側聞するところによると、記録に残っている日加貿易の始まりは一八七六年である。その時の日本からの輸出は緑茶と石炭（私の記憶が正しければ一万ドル程度）、カナダからの輸出は雑貨類（年額百二十六ドル）で、まことに小規模ながら日本側の出超。特に面白いのは、現在カナダの主要対日輸出品である石炭が、当時は日本側の主要輸出品であったことである。

日本では同じ一八七六年（明治九年）に、三井物産が世界貿易を目指してスタートした。奇しくも両者が同じ年であるのは、大変興味深い。

それからちょうど百年後の一九七六年、時のカナダ政府首相トルドー氏が、日本の対加投資勧誘とカナダ工業製品の積極輸入を謳い文句に、初めて訪日されたことは、我々の記憶に新しいところである。

トルドー首相訪日までの百年間に、日加貿易は相互補完の原則に立って質量共に飛躍的に増加した。私見によると、両国経済界の深い理解と暖い友情の上に立った本当の日加関係は、トルドー首相訪日以後今日までの五年間に育ってきたと言っても過言ではない。それはトルドー首相訪日のフォローアップとして日本外務省によって派遣された槇田ミッション、およびその所産として設置された日加経済人会議を通じて深まった相互の理解と友情にもとづくもの、と考えて差しつかえないと思う。これまで五回の日加経済人会議を通じて、諸々の誤解や不満は逐次解消または理解され、日加両国経済はごく一部の例外を除いて今や目配せ一つで物の言える仲になったと自負している。

私も過去半世紀におよぶ三井物産生活を通じて、経済人の国際交流がこれ程のスピードをもって、これ程の成功を収めた例を外に知らない。

何と言っても日加関係の重要性は、夢豊かなその将来性にあると思う。現在カナダにとっても日本にとっても、重要な国はほかに沢山あると思う。私の所属する三井物産においても、日加貿易は現在当社の貿易取扱い総量に対しわずか四パーセントに過ぎない。対加投資に至っては、もっと少ないだろう。しかし、十年後、二十年後の世界において、この両国関係ほど楽しく美しい夢の描ける国も数少ないのではないか。二十一世紀における両国関係について、われわれ経済人は壮大な理想を実現し得るものと確信している。

三井物産が王子製紙と共に資本参加しているNBIP社のダルハウジー（ニュー・ランズウィック州）製紙工場。